

## 1. 単元名 「わたしたちの食といのちをつなぐ米づくりプロジェクト」

## 2. 単元の目標

- ・ 米づくりを通して、食やいのち、環境とのつながりの中で、多くの人がそれぞれの立場で工夫や努力を重ねながら関わっていることや、その営みが自分たちの食や暮らしを支えていることを理解することができる。 (知識・技能)
- ・ 米づくりの体験や観察をもとに、食や環境に関する問いを見だし、農業高校生との対話や学習を通して整理・分析しながら、「食で大切なことは何か」「自分たちにできることは何か」について考え、学んだことを身近な相手に分かりやすく伝えることができる。 (思考・判断・表現)
- ・ 食やいのちを大切にしようとする目的意識をもち、米づくりに関わる人や仲間と意欲的に関わりながら、自分の行動を見直したり、感謝の気持ちを行動で表そうとしたりしている。 (主体的に学習に取り組む態度)

## 3. 単元について

## (1) 教材観

本単元では、米づくりの体験や水田観察を通して、食やいのち、環境とのつながりを実感しながら、地域の農を支える人々の工夫や努力、協力の大切さに気付くことを目指す。鹿屋市は畜産や農業が盛んな地域であり、米づくりは地域のくらしや産業を支える重要な営みの一つである。田植えや稲刈りなどの体験を重ねる中で、児童は作物を育てることの大変さや喜びを実感するとともに、水田が多くの生き物と関わり合って成り立っていることに気付くことができる。また、水田で見付けたタニシや稲の食害といった事象は、児童にとって違和感を伴う具体であり、「なぜタニシがいるのだろう」「なぜ稲が食べられているのだろう」といった問いを生み出すきっかけとなる。さらに、タニシが稲を食べることや、農薬という選択肢の存在を知ることで、問いは「なぜ農薬を使わずに育てるのだろう」といった価値判断を含むものへと更新される。こうした問いの更新を通して、児童は米づくりを単なる食料生産活動としてではなく、生き物のつながりや環境への影響を含めて多面的に捉え直すことができる。加えて、収穫米の販売やおにぎりパーティー (KANUYA RICE EXPO) 等の活動は、学んだことを身近な相手に伝える機会となり、児童が自分たちの学びを生活や行動へと結び付ける契機となる。こうした具体的な活動を通して、児童は食やいのちを大切にすること、多くの人に支えられていることへの感謝を行動で表すことの意味を考え、持続可能な地域のくらしを支えるために自分たちにできることを見いだしていくことが期待できる。

## (2) 児童観

本学級の児童は、人懐っこく素直であり、互いの違いを受け入れ合う関係性が育っている。「みんなちがってみんないい」という価値観が学級に共有されており、友達の個性やペースを尊重しながら関わる姿が見られる。日常生活においては、自然や生き物への親しみが深く、休み時間にはカナヘビや昆虫を捕まえたり、学級でカナヘビを飼育したりする姿が見られる。飼育の中で名前を付けたり、「何を食べるのだろう」と調べたり、家から虫かごを持参したりするなど、身近な疑問を生活と結び付けて探ろうとする姿がある。また、飼育していたカナヘビが死んだ際には、自分たちで墓を作り、花を添えて手を合わせるなど、命に対して真摯に向き合う行動が自然に見られた。一方で、残食が多いなど、食といのちのつながりを自分の行動として捉え、継続的な行動変容につなげるまでには至っていない面もある。また、「少し面倒だ」と感じると途中で投げ出してしまうなど、粘り強さに課題をもつ児童も見られる。優しさはあるものの、物事を地球規模で捉え、自分の行動と社会や環境との関係を意識して行動する段階には至っていない。さらに、集団で目的を共有し、協力して行動することに苦手意識をもつ児童が多く、自分の興味やペースを優先して行動する姿が目立つ。しかし、それは他者を軽視しているわけではなく、友達から学ぶよさや人と関わる価値そのものは認めている。悪気なく自分の好きなことに没頭する、おおらかでゆったりとした集団である。このような実態を踏まえ、本単元では、米づくりを通して多くの人に支えられていることに気付かせ、感謝の気持ちを行動で表すことや、集団で動くことの意味を少しずつ広げていくことをねらいとする。

### (3) 指導観

本単元の指導にあたっては、体験活動で生じた児童の気付きや違和感を丁寧に拾い上げ、問いが更新されていく学習過程を意図的に構成する。まず、代掻きや田植え、水田観察を通して、タニシの存在や稲の食害といった事象に気付かせ、「なぜタニシがいるのだろう」「なぜ稲が食べられているのだろう」といった問いを形成させる。その上で、社会科「米づくりのさかんな地域」と関連付け、米づくりの工夫や課題について学ぶことで、体験的な気付きと社会的背景を往還しながら考える視点をもたせる。続いて、問いを深めるために、米づくりに関わってもらっている農業高校生をゲストティーチャーとして招き、タニシが外来種であることや、農薬の使用が周辺の生物や環境に影響を及ぼす可能性があること、有機栽培の考え方などについて学ぶ機会を設定する。これにより、児童の問いを説明を求める段階から、「無農薬で育てる意味は何か」といった価値判断を含む問いへと更新させ、水田の多面的な機能や生き物のつながりに目を向けさせる。さらに、市販米との食べ比べや栄養教諭の講話を位置付け、「美味しい」「安い」といった価値だけでなく、背景にある人の努力や環境への影響にも目を向けさせることで、「食で大切なことは何か」という問いへと探究を広げる。単元の終末では、収穫米の販売やおにぎりパーティー（KANOKA RICE EXPO）を通して、学んだことを学校や保護者、地域の人に伝える活動を設定し、感謝の気持ちを直筆の手紙や行動として表す経験をもたせる。その際、発信の場を身近で地続きの相手にとどめ、「鹿屋にはいいところがあるから、もっと伝えたい」「たくさんの人に伝えたい」という思いを残すことで、次年度の学習へとつなげていく。最終的に、本単元全体を振り返り、多くの人に支えられていることへの実感をもたせるとともに、食べ残しを減らすなど、学校生活や家庭生活における具体的な行動変容につなげていく。

### (4) ESD との関連

#### ・本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

相互性：生き物どうし、人と自然、農業とくらしは互いにつながり合っている。農薬の使用はジャンボタニシだけでなく、他の生物や水田の環境、さらには人の食やくらしにも影響を及ぼす可能性がある。

有限性：農薬に頼らず米を育てることや、食品ロスを減らすことは、限りある自然環境や資源を守り、将来にわたって食やくらしを持続させていくことにつながる。

連携性：米づくりは、一人の力だけでは成り立たず、農業高校生、保護者、学級の仲間など、それぞれの立場の人が関わり合い、協力することで支えられている営みである。

#### ・本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

- ① システムズ・シンキング：過農薬の使用について、「安全か危険か」といった単純な捉え方ではなく、生物多様性、環境への影響、農家の努力や工夫、食の安心など、複数の視点を関連付けながら考えることができる。
- ② クリティカル・シンキング：日常の食生活において、当たり前として受け止めてきた「美味しい」「安い」「便利」といった価値を問い直し、「食で本当に大切なことは何か」「自分にできる選択は何か」を考えることができる。
- ③ 協働的問題解決力：米づくりに関わる人や学級の仲間と対話しながら、互いの考えや役割を認め合い、自分たちにできる行動を協力して実行しようとするすることができる。

#### ・本学習で変容を促す ESD の価値観

##### ① 世代間の公正を重視する価値観

薬を使わない米づくりや、食べ残しを減らす行動は、今の自分たちだけでなく、将来の人々の安全や環境、地域の農を守ることに繋がるという視点をもつ。幸福感に敏感になる、幸福感を重視する今の自分たちが幸せであることだけが、将来的な幸せにつながるとは限らない。

##### ② 身近な幸福感を見つめ直す価値観

「今、便利であること」「今、美味しく食べられること」だけでなく、その背景にある人の努力や環境への影響に目を向け、自分の選択が将来の幸せにつながっているかを考えようとする。

#### ・達成が期待される SDGs

2 飢餓をゼロに      12 つくる責任      つかう責任      15 陸の豊かさを守ろう

#### 4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
<p>① 米づくりを通して、食やいのち、環境とのつながりの中で、多くの人がそれぞれの立場で工夫や努力を重ねながら関わっていることを理解している。</p> <p>② 米づくりが、食料を生産する活動であると同時に、生き物のすみかや環境とも関わる営みであることを理解している。</p>	<p>① 米づくりの体験や観察をもとに、食や環境に関する問いを見だし、農業高校生との対話や学習を通して整理・分析しながら考えている。</p> <p>② 「食で大切なことは何か」「自分たちにできることは何か」について考え、学んだことを相手や目的に応じて分かりやすく表現している。</p>	<p>① 食やいのちを大切にしようとする目的意識をもち、米づくりに関わる人や仲間と関わりながら、意欲的に学習活動に取り組んでいる。</p> <p>② 自分の行動を振り返り、感謝の気持ちを行動で表したり、食べ残しを減らしたりなど、学びを生活に生かそうとしている。</p>

#### 5. 単元の指導計画（全 30 時間）

学習活動	学習への支援	評価
<p>1 代掻き体験や水田観察を行い、田んぼの様子や生き物に気付く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・泥の中で足に固いものが当たった。</li> <li>・タニシがたくさんいる。</li> <li>・タニシがいると何が起きるのだろう。</li> <li>・田んぼって思っていたより生き物が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○裸足での代掻きを行い、足の裏の感覚に意識を向けさせることで、違和感を伴う体験を意図的に生み出す。</li> <li>○「見たこと」「感じたこと」「気になったこと」を分けて記録できる観察シートを用意し、気付きが問いに変わるよう支援する。</li> <li>○タニシや生き物をすぐに説明せず、「気になるね」と問いとして受け止める姿勢を大切にする。</li> </ul>	ウ①
<p>2 夏の水田観察を行い、稲の成長や食害の様子を比べながら原因を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前よりタニシが増えた気がする。</li> <li>・稲が元気な所と食べられている所がある。</li> <li>・理由は一つじゃなさそう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○前回の観察写真や記録と並べて提示し、「変わった点」「同じ点」に着目させる。</li> <li>○生き物、人の関わり、環境の視点カードを配り、どの視点で考えているかを可視化する。</li> <li>○理由を一つにまとめさせず、「いくつか考えられるか」を価値ある思考として扱う。</li> </ul>	イ①
<p>3 農業高校生の授業Ⅰで、タニシと農薬について学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・タニシは外来種なんだ。</li> <li>・農薬は他の生き物にも影響するんだ。</li> <li>・カナヘビがいなくなるのは嫌だ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○事前に子供たちの問いを模造紙に整理し、授業冒頭で農業高校生に共有する。</li> <li>○農薬のメリット・デメリットを図や写真で示し、単純な善悪判断にならないよう支援する。</li> <li>○自分たちの生活（カナヘビ、昆虫）と結び付けて考えられるよう発問する。</li> </ul>	ア②
<p>4 稲刈りを行い、稲を刈り取る作業を体験する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・思ったより重い。</li> <li>・全部手でやるのは大変。</li> <li>・これを何回もやっている農家さんはすごい。</li> <li>・一粒も無駄にしたくない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○鎌を使った稲刈りを体験させ、機械化された農業との違いに気付けるようにする。</li> <li>○刈り取った稲を実際に持たせ、「重さ」「量」を体感的に捉えさせる。</li> <li>○「もしこれを一人でやったらどうなるか」と発問し、人の協力や工夫に目を向けさせる。</li> </ul>	ア① ウ①
<p>5 脱穀作業を行い、稲から米になるまでの工程を体験する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・やっと米が見えてきた。</li> <li>・みんなでやらないと終わらない。</li> <li>・機械があるから助かっているんだ。</li> <li>・昔の人はもっと大変だったと思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○手作業と機械作業を組み合わせ、人の力と技術の両方を実感させる。</li> <li>○社会科で学んだ米づくりの工夫や機械化と関連付けて振り返らせる。</li> <li>○役割分担を明確にし、協力しないと作業が進まない状況を意図的に設定する。</li> </ul>	ア① ウ①

<p>6 農業高校生の授業Ⅱで、藁ぼうきを作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・藁って捨てる物ではなくて、生活に役立つんだな。</li> <li>・捨てるはずだったものが、使えるものになるとゴミが減るな。</li> <li>・無駄がないように昔の人は知恵を働かせていたんだな。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○稲→米→藁の流れを図で示し、循環の視点で捉えられるようにする。</li> <li>○「もし藁を捨てたらどうなるか」を考えさせ、有限性の視点につなげる。</li> <li>○手を動かす活動と考える活動を往還させる。</li> </ul>	<p>ア①</p>
<p>7 収穫米と市販米を食べ比べ、栄養教諭の話聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金額で決めていたけど、値段には理由があるんだな。</li> <li>・自分で作ったお米は美味しいな。</li> <li>・意外と味が変わらなかったな。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「美味しかった。」という感想で終わらないように、味の感想と背景の気づきを分けて記録できるシートを使用する。</li> <li>○価格、作り方、環境の違いを比較表で整理する</li> <li>○「どちらが正しいか」ではなく「何を大切にするか」を考える問いを投げかける。</li> </ul>	<p>ア② イ①</p>
<p>8 収穫米販売に向けて準備し、伝え方を考え、手紙を添えて渡す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・感謝の気持ちや食べ物を大切にしてほしいということを伝えたい。</li> <li>・たくさんの人たちに支えられて米作りができたことを伝えたい。</li> <li>・どうやったら伝わるだろうか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○購入者像を想定し、誰に向けた手紙かを明確にさせる。</li> <li>○「感謝」「学び」「これから」の視点カードを提示し、内容構成を支援する。</li> <li>○文章だけでなく、絵やレイアウトも表現として認める。</li> </ul>	<p>イ② ウ①②</p>
<p>9 KANOYA RICE EXPO（おにぎりパーティー）を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・たくさんの人が来てくれた。</li> <li>・説明したら分かってもらえた。</li> <li>・残さず食べてほしい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○保護者や地域の人を招き、おにぎりを一緒に食べて味わいながら、米作りを通して得た学びを直接伝える場を設定する。</li> <li>○「何を伝えたいか」を事前に確認し、その場で振り返りを行う。</li> <li>○感想カードを回収し、学習の成果として共有する。</li> </ul>	<p>イ② ウ②</p>
<p>10 単元全体を振り返り、学びを整理する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・食べるということは、いのちをもらうことなんだと分かった。</li> <li>・お米一つでも、農家の人、生き物、自然、たくさんの人が関わっている。</li> <li>・自分とは関係ないと思っていたけど、自分の行動も田んぼや環境につながっている。</li> <li>・食べ残しや選び方を、これからは考えたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「考えが変わったこと」「分かったこと」「これからも続けたいこと」の三つの視点で振り返りを書かせ、学びの変容を自覚できるようにする。</li> <li>○振り返りを個人で終わらせず、友達の記述を読み合う時間を設定し、自分とは異なる価値観や感じ方に触れられるようにする。</li> <li>○教師が、子供の記述の中から「相互性」「有限性」「連携性」に関わる言葉を拾い上げ、ESDの視点として言語化して返す。</li> </ul>	<p>ウ②</p>
<p>11 次年度につながる問いを共有する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・もっとたくさんの人に、この米づくりのことを伝えたい。</li> <li>・鹿屋にはいいところがあるから、他の人にも知ってほしい。</li> <li>・他の地域の農業や取組も知ってみたい。</li> <li>・6年生になったら、今度は発信する側をやってみたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○単元を通して生まれた問いをカードに書かせ、「これからも考え続けたい問い」として教室に掲示する。</li> <li>○問いを「伝える」「広げる」「比べる」などの観点で整理し、学びが終わりではなく続いていくことを実感させる。</li> <li>○教師が、5年生で積み重ねた体験や気づきが、6年生の鹿屋PRプロジェクトでの発信につながることを言語化し、学年間の接続を明確にする。</li> </ul>	<p>ウ②</p>

## 6. 成果と課題

本単元では、米づくり体験を核にしながら、水田観察で生まれた児童の違和感や気づきが問いへと転化し、農業高校生や栄養教諭との学習を通して問いが更新されていった。結果として、単なる農作業体験にとどまらず、生き物同士、人と自然、農業とくらしのつながりを捉え直す学びが展開された。一方で、ねらった資質・能力のうち、確かな手応えが得られたものと、想定とは異なる形で育成されたもの、あるいは十分に定着しなかったものも見られた。以下、SDGsの観点から成果と課題を整理する。

### (1) SDGs15「陸の豊かさを守ろう」

#### 【成果】

水田観察において児童が強く反応したのは、「タニシが多い」「稲が食べられている」という現象そのものよりも、「自分たちが大切にしている生き物の世界が揺らぐ感覚」であった。農業高校生の話を聞いた後には、「農薬を使えばタニシは減るかもしれないけど、カナヘビのえさになる虫も減るかもしれない」「教室で飼っているカナヘビが生きられなくなるのは嫌だ」と語る児童が見られた。ここには、身近な生き物への愛着を起点に、田んぼで起きている変化が他の生き物や自分たちの生活にも影響するという、相互性が見方働いている。

また、児童の意見は単純な善悪判断に流れることなく、「農家さんは大変だと思う」「全部手で稲刈りをするのは現実的ではない」「それでも生き物は守りたい」というように、複数の要因を同時に考え続ける姿が見られた。当初ねらいとして設定していたクリティカル・シンキングに加え、それぞれの立場を自分事として捉えながら関係性全体を考えようとする、システムズ・シンキングの芽生えが児童の言葉から窺えた。

さらに、藁ぼうき作りでは、「藁は捨てるものだと思っていた」「捨てずに使うとゴミが減る」「昔の人は無駄にしない工夫をしていた」という振り返りが多く見られ、有限性の視点が具体物と結び付いた。ここでは、「環境を守るために我慢する」という発想よりも、「工夫によって無駄を減らせる」という前向きな価値形成が促された点に意義がある。

#### 【課題】

一方で、児童の思考は体験に強く依拠しており、関係性を構造として整理する段階までは十分に到達していない。「農薬を使うかどうか」を考える際に、「生き物」「収量」「手間」「安全」などの要素を挙げることはできても、それらがどのように影響し合っているのかを図式化して捉える支援が不足していた。

また、「陸の豊かさ」という概念が、水田という限定された場面に閉じて理解される傾向も見られた。今後は、水田を起点にしながら、川や海、地域の農地や里山とのつながりへと視野を広げ、再構成する学習設計が求められる。

### (2) SDGs12「つくる責任 つかう責任」

#### 【成果】

市販米との食べ比べや栄養教諭の講話を通して、児童の語りは「おいしい」「自分たちのお米が一番」といった感想から、「値段には理由がある」「作り方によって環境への影響が変わる」「便利さの裏には人の努力がある」といった背景理解へと広がった。例えば、「今までは安い方を選んでいただけ、安いのが悪いわけじゃない」「作っている人のことを知ったら、考えて選びたい」と話す児童がおり、当たり前として受け止めていた価値を一度立ち止まって捉え直そうとする姿が見られた。

また、収穫米販売に向けた手紙づくりでは、「感謝の気持ちをどうしたら伝えられるか」を考え、言葉だけでなく絵や配置を工夫する姿が見られた。「米作りの大変さや、たくさんの人が関わってくれたことを伝えたい」と語る児童もおり、消費者としての「つかう責任」が、自分一人の行動や押しつけではなく、社会とつながる意識として表れていた。

単元終末の振り返りでは、「給食を残していたけど、食べられる分をもう一口だけでも食べたい」「おかわりする人がいるのに残すのはもったいない」「家でもごはん粒を残さないようにした」といった生活場面の変化が言葉として現れた。さらに、インフルエンザによる学級閉鎖時には、「こんなに残ってもったいないな」と言い、普段はおかわりをしない児童が進んでおかわりをする姿も見られた。行動の大小は別として、「食べ方が環境や人につながっている」という相互性が、日常生活へと接続され始めた点は大きな成果である。

### 【課題】

一方で、こうした行動変容は揺れやすく、継続性に課題が残った。学習直後は意識していても、体調や好み、周囲の雰囲気によって元に戻る場面も見られた。これは児童個人の意志の問題というよりも、行動を支え、振り返り続ける仕組みが、カリキュラム全体として十分に位置付けていなかったことに起因すると考えられる。

### (3) SDGs2「飢餓をゼロに」

#### 【成果】

稲刈りや脱穀の体験では、「重い」「終わらない」「一人では無理」という実感が強く、そこから「農家さんはすごい」「機械があるのはありがたい」「手伝う人がいるから進む」といった気付きが生まれた。特に脱穀作業では、役割分担がうまくいかないと工程が停滞するため、「自分がやらないとみんなが困る」という経験が、協働の必要性を道徳的に教えられるのではなく、作業の必然として実感された。

また、農業高校生や保護者との関わりを通して、「教えてもらう」「支えてもらう」経験が積み重なり、児童の中に感謝の思いが蓄積された。

当初は協働的問題解決能力の育成を主なねらいとしていたが、実際には、問題解決の技法以上に、「人に支えられていることへの実感から、自分も役に立ちたいと願う態度」、すなわち関係性の中で育つ主体性が顕在化した点が大きな成果である。これは、SDGs2を遠い世界の課題としてではなく、「身近にある食を支える営み」として児童の生活と地続きの学びとなった。

#### 【課題】

一方で、「世界の食問題」や「食の不平等」といった社会構造への視野は十分に広がり切っていない。児童の実感には主に「自分たちの米づくり」や「身近な残食」に集中しており、流通や国際的課題との接続は弱かった。

また、協働についても、「役割を与えられたら動ける」段階にとどまる児童が一定数見られた。今後は、児童自身が必要な役割を見だし、提案し合う場を意図的に設定することで、協働をさらに深めていく必要がある。

### (4) 総括

本単元は、SDGs15を起点に、自然や生態系への相互性を見方を育て、SDGs12へと生活場面における選択の在り方へつなげ、SDGs2へと食を支える人や営みへと視野を広げていく学習として機能した。

資質・能力の面では、当初ねらったクリティカル・シンキングや協働的問題解決能力は一定程度育まれたものの、それ以上に、児童の生活世界に根ざしたシステムズ・シンキングの芽生えと、感謝の思いを行動で表そうとする態度が顕在化した点が特徴的であった。

今後は、体験で生まれた気付きや価値判断を構造として整理し直す学習過程をより厚くし、行動変容を支える仕組みを整えることで、ESDの学びを一過性に終わらせることなく、次年度の発信へと確実につないでいきたい。

現在の学年終了時に目指す姿

自分たちが日々食べている米が、地域の自然や多くの人の工夫・努力によって支えられていることに気付き、食やいのちを大切にしようとする意識を高めるとともに、地域の一員として何ができるかを考え、仲間や地域の人と協働しながら、自分の生活や行動をよりよくしようと主体的に行動することができる。



総合的な学習の時間「わたしたちの食といのちをつなぐ米づくりプロジェクト」

○ 主に養いたい ESD の資質・能力

システムズ・シンキング：過農業の使用について、「安全か危険か」といった単純な捉え方ではなく、生物多様性、環境への影響、農家の努力や工夫、食の安心など、複数の視点を関連付けながら考えることができる。

クリティカル・シンキング：日常の食生活において、当たり前として受け止めてきた「美味しい」「安い」「便利」といった価値を問い直し、「食で本当に大切なことは何か」「自分にできる選択は何か」を考えることができる。

協働的問題解決能力：米づくりに関わる人や学級の仲間と対話しながら、互いの考えや役割を認め合い、自分たちにできる行動を協力して実行しようとするすることができる。

○ 主に育てたい ESD の価値観

世代間の公正を重視する価値観：薬を使わない米づくりや、食べ残しを減らす行動は、今の自分たちだけでなく、将来の人々の安全や環境、地域の農業を守ることにつながるという視点をもつ。幸福感に敏感になる、幸福感を重視する。今の自分たちが幸せであることだけが、将来的な幸せにつながるとは限らない。

身近な幸福感を見つめ直す価値観：「今、便利であること」「今、美味しく食べられること」だけでなく、その背景にある人の努力や環境への影響に目を向け、自分の選択が将来の幸せにつながっているかを考えようとする。

